

土木学会四国支部「土木紀行」No.53(高知県)

「早明浦ダム」

早明浦ダムは、高知県の土佐郡土佐町田井と長岡郡本山町吉野にまたがり、一級河川吉野川の河口から約 140km の位置に存在する。型式は重力式コンクリートダムで、堤高 106m、堤頂長 400m、貯水池面積 7.5km²、総貯水量 3 億 1 千 6 百万 m³ の四国最大のダムであり、「四国のいのち」と呼ばれている。瀬戸内側は雨が少なく年間 1250mm 程度の降雨量で水不足の問題があり、逆に太平洋側の高知県では年間 3000mm 以上と降雨量が多いが台風等による洪水被害に悩まされていた。そこで降雨量が多い高知県にダムを建設することで洪水被害を軽減させるとともに、ダムに貯水した水を水道用水、農業用水、工業用水として瀬戸内側へ送ることで水不足の解消を図った。四国四県の流量配分は徳島県 48%、香川県 29%、愛媛県 19%、高知県 4%となっている。また、早明浦ダムは計画的に水量を調節することで日照り等に関係なく河川環境を維持でき、河川の生物や河川の水を利用する人々に対しても大きなメリットとなっている。さらにダムに貯水した水を放流する際に水の落差を利用して発電する水力発電も行っている。

ダム建設の問題となったのは、本山町、土佐町、大川村の 385 戸 387 世帯が水没の対象となったことである。この水没世帯数は当時としては大規模であり、ダム建設に対する猛烈な反対運動が起こった。現在の渇水時に現れる大川村の村役場庁舎は、ダム建設反対の意思の強さを示すものとして、あえてダム建設計画後に想定水没地に新設したものである。住民は四国の新たな水資源開発のために住み慣れた故郷を永久に失うという犠牲を払った。このような犠牲のもとに早明浦ダムが建設されたことを忘れてはならない。



図 1 早明浦ダム



図 2 早明浦発電所

早明浦ダムによって形成された人工湖であるさめうら湖は、西日本の人工湖の中では奈良県の池原ダムに次ぐ規模を誇っており、観光スポットにもなっている。春は早明浦ダムやさめうら湖周辺に桜が咲き、多くの花見客が訪れる。そのほかにもマラソンや釣り大会等のイベントも行っている。

早明浦ダムを見学し、その大きさから「四国のいのち」と呼ばれる理由が理解できた。実際に目で見て、あの水量が四国を救っているのだと実感し、早明浦ダムはなくてはならないものだと感じた。



図 3 さめうら湖(1)



図 4 さめうら湖(2)



図 5 早明浦ダム周辺(1)



図 6 早明浦ダム周辺(2)

出典：独立行政法人水資源機構 池田総合管理所ホームページ

http://www.water.go.jp/yoshino/ikeda/sameura/same_top.html

(高知高専専攻科 建設工学専攻 2年 浅野 健二)